

令和2年度 体育部会研究計画

1 研究主題

豊かな学びが 子供の未来をつくる 体育学習
－「おもしろいコト」の共有から学びをスタートすることにより、
豊かな学びへと続く授業づくり－

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領の改訂

新学習指導要領の全面実施にともない、「何を知っているか」から、知識を活用して「何ができるか（できるようになるか）」という「資質・能力」を育成することが求められる。では、これからの時代に求められる資質・能力とは何か。学習指導要領前文には、「これからの学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。また、学習指導要領総則では、教科等横断的な視点に立った資質・能力を明記し育成すること⁽¹⁾、学習指導要領解説体育編第1章総説には、学校教育に求められる資質・能力⁽²⁾が示されている。つまり、新学習指導要領は、各教科等の目標の達成を目指しつつ、これからの時代に求められる資質・能力を育成していくことを中心的な課題とした改訂であるといえる。

(2) 「豊かな学び」の必要性

体育科では、生涯にわたってスポーツに関わることや、生涯にわたって健康な生活を送ることができる子供を育成することを目指している。昨年度は本県にて中・四国小学校体育科教育研究大会（以下、中・四大会）が開催された。「豊かな学びが 子供の未来をつくる 徳島の体育」を主題として各郡市で研究を進め、徳島の体育がこれまで培ってきた子供ありきの学習を大切にしながら、全ての子供が自分なりのこだわりをもって課題追求に向かう授業づくりに取り組んだ。また、主題に掲げた「豊かな学び」を、「自ら課題に気づき、思考し仲間と関わりながら課題解決することに価値を感じられるような学び」とし、子供が「豊かな学び」を行うことにより、体育科の目標を達成することを目指した。すると、「開脚跳びができた」という結果だけを大切にすることはなく、練習の仕方を思考（試行）したり、友達と関わって技術情報を共有したり、ねばり強く挑戦したりして学ぶという、学びの過程や資質・能力の育成も大切に実践提案がされていた。つまり、「豊かな学び」は、新学習指導要領で示された、「教科等横断的な視点に立った資質・能力」や「学校教育に求められる資質・能力」の育成を図りながら体育科の目標を達成しようとする学びととらえることができる。

このことは、しばしば子供の成長を樹木の生長で例えられていることではあるが、花や実ができることだけを目的とするのではなく、同時に、幹や葉がたくましく育つことや、根をしっかりと伸ばしていくことも意識していこうとする考えと同様である。花や実を「知識・技能」、幹や葉を「思考力・表現力・判断力等」「学びに向かう力、人間性等」、根を「教科等横断的な視点に立った資質・能力」「学校教育に求めら



れる資質・能力」と考えると「豊かな学び」の必要性が実感できる。

このようなことから、今年度は「豊かな学びが 子供の未来をつくる 体育学習」と主題に据え、体育学習を通して、これからの時代に求められる資質・能力を育成する研究を推し進めることとする。「豊かな学び」については、昨年度の主題と学習指導要領解説体育編第1章総説から、「見通しをもって学習に参加し、新たな価値を見出し、仲間と関わりながら課題解決に挑戦しようとする学び」としたい。そして、子供が生涯にわたってスポーツに関わることや、生涯にわたって健康な生活を送るための体育科の目標の達成を「大きな樹木へと生長する」、つまり「子供の未来をつくる」と考え、体育学習を通してどのような学びを行っていくか研究していく。

3 副主題設定の理由

(1) 「おもしろいコト」の共有

昨年度は、運動がもつ様々なおもしろさの中から、「運動の本質的なおもしろさ」⁽³⁾に注目して研究を進めていった。「運動の本質的なおもしろさ」は誰もが夢中になれるおもしろさであるとし、そのおもしろさにふれながら学習を進めていくことで、子供は解決すべき課題に気づき、こだわりをもって課題解決に取り組むことができると考えた。

この主題を受け、中・四大会では、「運動・健康の本質的なおもしろさ」から、子供が「参加してみたい・考えてみたい」と思えるような、運動・健康の「おもしろいコト」⁽⁴⁾の共有から単元をスタートした。「ふれる」ではなく「共有」としたのは、運動に対して苦手な子供は自分から積極的に運動に関わっていくことが難しいため「ふれながら学習を進める」のではなく、「おもしろいコトはこれ」と共有することが必要だと考えたからである。そこで、教師から「これをやってみようよ」と、子供が「参加してみたい・考えてみたい」と思えるような運動や、健康に関するテーマを提示することにより、すべての子供が「おもしろいコト」を共有できるようにした。すると、体育学習に対して苦手意識をもつ子供が、他の子供と同じように「おもしろいコト」に夢中になって挑戦する姿が見られたという報告があった。うまく共有ができた授業では、子供の学びの過程から生まれる課題が関連していき、子供の課題解決にとって効果的な「問い」や「問いかけ」、支援を行うことができた。

例えば、跳び箱運動では「移動するおもしろさ」を「本質的なおもしろさ」とし、「どうすれば跳び箱の向こう側に行けるか」という「おもしろいコト」を共有するために、「おしゃれに跳び箱の向こう側にいけるかな」と「問い」を行った。すると、子供はどんな跳び越え方をするか、どの場を選ぶか、どうすれば向こう側へいけるかなど、子供なりのおしゃれを考え課題を設定した。初めは子供がそれぞれの課題に対して思考（試行）するのだが、学習が進むにつれて助走や踏み切り・着手など、それぞれの課題が跳び越えるための技能課題として関連していった。教師は、子供の学びの状況から子供同士に関わりを促し、それぞれの学びを紡いだり、新たな情報を得るために副読本を見るよう助言したりと、教師も一緒になって学びに参加していった。

しかしながら、教師の思いが先行し、子供が「おもしろいコト」を共有する前から課題を提示して、すべての子供が夢中になって参加できなかつたり、子供が追求したい意味ある課題にならなかつたりしたという報告もあった。

(2) 子供の実態の把握

現在の学級には、運動の苦手な子供だけでなく、外国籍の子供や特別な支援を必要とする子供など、多様な子供が在籍している。すべての子供が「やってみよう」と感じ夢中になるためには、「どのような意識で参加するか」という子供の内面を大切にする。そのために、子供の体育学習に対する意識やこれまでの学びの状況を把握する必要がある。昨年は、子供に事前アンケートを

行い、それぞれの運動に対してどのようなイメージをもっているかを把握することにより、子供の実態から学習材や場づくりを工夫することができた実践があった。その結果、事前には参加しづらいと感じていた子供が、安心して学びをスタートすることができ、単元を通して運動のおもしろい世界や健康の本質的な問いを考える学習に参加することができた。これからますます多様化する子供の理解に努め、合理的配慮やユニバーサルデザインの視点を持ち単元構想や授業づくりについて考えていく。

(3) 子供の実態に合った「問い」と「環境」の設定

昨年は、子供が「運動・健康の本質的なおもしろさ」にふれながら課題解決できるように、マツト運動（遊び）では、「むこうまで」「止まらずに」「スムーズに」など、学年によっての違いを「問い」に入れるようにした。しかし、子供が「やってみたい」と参加したり、「こうしてみたい」と挑戦したり、こだわりをもって課題追求できなかつたりした実践も見られた。そこで、単元の始めには子供の実態に合った「問い」と「環境」の設定を行うことにより、「運動・健康の本質的なおもしろさ」から、「おもしろいコト」を共有し、「やってみたい」と参加・挑戦することができるようにしてきた。

子供の実態に合った「問い」とは、「おもしろいコト」の共有が図られたり、こだわりをもって課題追求ができたりするために行う。例えば、走り幅跳びでは「移動するおもしろさ」が「本質的なおもしろさ」である。そこに、「どうすればねらった所に着地できるか」という「おもしろいコト」の共有を図るために、「自分のギリギリに着地できるかな」という「問い」を出す。そうすることにより、子供は自分のギリギリの所まで跳ぶために、「どのようにして跳べばよいか」と思考（試行）し、課題解決に向かう。

子供の実態に合った「環境」とは、「場」「用具」「ルール」などである。子供が学びをスタートする際に安心して参加・挑戦できるような環境、「おもしろいコト」をより味わうことができるような環境や、子供が課題解決できるような環境などが挙げられる。ネット型で例えると、「ネットの高さ」、「ボールの種類や材質」、「キャッチの有無」などの環境を設定することである。

以上の理由で、今年度も「おもしろいコト」の共有から単元をスタートして課題解決を進めていきたい。また、昨年と同じように培いたい資質・能力を発揮することによって体育科の目標を達成することも引き継いでいく。培いたい資質・能力については、「主題設定の理由」でも述べたように、子供が学びの中で発揮する、教科等横断的な視点に立った資質・能力とする。

このような考えのもと、今年度は「運動・健康の本質的なおもしろさの共有から学びをスタートすることにより、豊かな学びへと続く授業づくり」を副主題として、子供の「学びのはじまり」である単元の導入を大切に授業づくりについて研究を進めていくこととする。

4 研究内容

昨年の研究から見えてきた課題解明への提案として、子供の実態に合った「問い」や環境を設定し、「おもしろいコト」へ「挑戦したい」、「追求したい」と参加できるようにする。そして、自分なりや仲間とともにおもしろさに夢中になって運動したり、健康について考えたりする。このような学びの中に教科等横断的な視点に立った資質・能力（培いたい資質・能力）を発揮した「豊かな学び」が実現する。

このような授業づくりについて、以下に具体的な研究内容を解説する。



(1) すべての子供が「おもしろいコト」を共有するための支援

①「おもしろいコト」の共有について

「運動・健康の本質的なおもしろさ」から、「おもしろいコト」の共有を行い、すべての子供が参加・挑戦することができるように、まずは、「おもしろいコト」が何か見出さなければならぬ。それは、その運動に夢中になる出来事（ワクワクドキドキするコト）や、健康に関する切実性があるコトである。そして、教師も子供と同じ「おもしろいコト」の世界に入り、学びを深められる協働行為者として存在することが必要である。ここで共有すべきことは、子供が夢中になる「おもしろいコト」であり、子供は「おもしろいコト」に夢中になりながら知識・技能を身に付けていく。注意したいのは、学習内容を全体構造から分解し、部分ごとに教えていく学習（分習式）である。この方法が、子供にとって安心感を与え、「おもしろいコト」に夢中になれる意図があればよいのだが、「おもしろいコト」に夢中になれず、スキル習得だけのための時間になることがないようにしたい。

運動領域においては、運動のおもしろい世界に積極的に参加し挑戦できるように、すべての子供が「やってみよう」と思えるような運動を提示する。その運動に夢中になれる出来事を「おもしろいコト」とし、できるかできないかに挑戦することができるようにする。中には、これまでの運動経験の違いから技能差が生まれ、「おもしろいかな」「不安だな」と思いながら学習をスタートする子供がいると考えられる。その時に、子供の実態に合った「問い」や「環境」を設定し、自分なりの見通しがもてるような「問い」や易しい場の設定、不安要因を取り除く用具の使用、簡単なルールの設定などで、全員が「おもしろいコト」を追求できるようにする。

次に、保健領域では「健康に関する切実性のある問い」から自分事として見通しをもてるように単元を構想する。健康に対して、これまでの経験からの自身の認識と他者の認識が出合ったときに生まれる差異が、保健学習の「おもしろいコト」ととらえる。単元の始めには、子供一人一人の生活習慣調査やウェビングマップなどの方法で、自分自身の健康に対する認識を確認したり、健康に対するイメージを話し合ったりするような活動を行う。一人一人が単元の始めに健康についての関心を高められるような活動を通して、健康に関する本質的な問いを共有し、自分事として課題を解決していく見通しがもてるようにする。

②子供の実態の把握と学びの状況に合った支援

昨年の多くの発表では、「運動・健康の本質的なおもしろさ」の共有を行うためには、子供の学習準備状況や運動・健康に対するイメージを把握することが大切であると報告されている。すべての子供が体育学習に対して興味があるわけではないことを知り、単元計画を行う際に子供への事前調査を実施し、実態の把握に努めた。事前調査は、「実態把握と実態に合った問い」、「学習材の工夫」、「子供の姿を見ること」などのために必要であり、アンケート形式にとらわれずに、子供の思いが表出できる方法で行うことが望ましいと考える。

事前調査の結果は、「意欲的に参加する子供は何がおもしろいのか」や「積極的に参加しない子供は何が理由なのか」を明示する。そうすることにより、単元構想時に子供の学びの姿から、子供の意識やつまづきを予想することができる。すると、教師の関わり方を事前に考えておくことができ、授業では柔軟な対応ができるであろう。例えば、「前転をした後、元の体勢にもどりたいけど、もどることができない（マット運動）」や「スペースに走ることができずにゴールまでボールを運べたいけど運べない（ボール運び鬼）」のように、どのようなつまづきがあるかを想定し、授業の中でつまづいている子供に「足を曲げてかかとをお尻に引きつけてみたらどうかな」や「友達と同時に走ってみたらどうかな」と必要な情報を具体的に示す。そうすることにより、子供が「おもしろいコトへの挑戦の意欲を失わずに学び続けることがで

きる。このように、具体的な支援を考え、子供によって問いかけた方がよいか、情報提供をした方がよいか判断でき、子供が自分なりに学びを深めていくための支援を行うことができるのである。

最後に、授業の中で教師が見取ることができなかつた子供の思いや気付きを把握するために、副読本の「学習のあしあと」のページに記入した毎時間の振り返りを活用する。そして、子供一人一人の振り返りから、子供の意識の流れに沿った単元計画へと修正したり、次時の関わり方を想定したりして、子供に切実性のある本時の問いを立てる。

このように、子供の情意面や技能面での実態をつかみ「おもしろいコト」への共有を考えることにより、子供が安心して「おもしろいコト」に参加し挑戦することができる。そして、学びがスタートすると、子供が問いに対してどのように学んでいるか、またどんなことにつまずいているかという子供の状況を把握し、子供に寄り添うことに努め、共感する。そうすることにより、問いかけや情報提供は、子供一人一人に合った支援となり効果的となる。

(2)「豊かな学び」を授業の中で行う際の見取りと支援

昨年度は、「豊かな学び」を「自ら課題に気付き、思考し仲間と関わりながら課題解決することに価値を感じられるような学び」と措定していたため、中・四大会では教科等横断的な視点に立った資質・能力（培いたい資質・能力）として、主体性やコミュニケーション力、情報活用能力を発揮した学びが「豊かな学び」となると考えた。学習指導案には、子供の学ぶ姿を具体的に予想して、「培いたい資質・能力」がどのように発揮されているのか明記した。それは、「培いたい資質・能力」とは、子供が「どのように学ぼうとしているか」という姿の中に現れてくることで、高まっていると判断することができると思ったためである。また、学びの姿を想定することにより、授業づくりの視点がより子供ありきになり、子供が知識・技能の習得する過程で「豊かな学び」が行えていることを確認しながら、見取りや支援を行うことができた。そして、子供は「培いたい資質・能力」を発揮して、自分の課題解決に必要な情報を獲得し、思考（試行）することにより技能の高まりが見られた。

こうして「豊かな学び」を行いながら知識・技能の獲得を目指すように方向付けることにより、体育科の目標の「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性」の育成にも効果が見られた。しかしながら、「豊かな学び」をどのように授業の中で行うのか十分な共通理解が図られなかったため、各郡市では研究が進まなかったという声も聞こえてきた。

このようなことから、今年度も、「豊かな学び」を授業の中で行う際の見取りや支援を研究していくこととする。「豊かな学び」については、「見通しをもって学習に参加し、新たな価値を見出し、仲間と関わりながら課題解決に挑戦しようとする学び」と先に述べた。今回の副主題では、「おもしろいコト」の共有から学びがスタートするとある。したがって、「おもしろいコト」の共有ができ、課題追求を行っていく場面に「豊かな学び」が行えるよう、「見通しをもって参加する力」、「新たな価値を見付ける力」、「仲間と協働して課題を解決する力」を発揮させたいと考えた。この中には、昨年の主体性・コミュニケーション力・情報活用能力も内在していると考えられる。

研究の方向としては、「豊かな学び」と想定した姿が見られるために、どのような場面を設定するか、どのように関わるのかを考えていきたい。また、「培いたい資質・能力」の評価であるが、事前に想定した姿が現れたかどうかを見取り、単元展開や支援などの改善につなげていく。そうすることにより、子供の学びの過程や「培いたい資質・能力」が育成されながら、体育科の目標の達成を目指した単元構想や授業づくりが展開される。

5 研究方法

(1) 研究大会において

○本年度は研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研究会を経て、第58回中・四国小学校体育研究大会（広島大会）において研究成果を発表する。

(2) 各郡市部会において

○研究主題及び副主題の解明に向けて、授業研究会及び研修会を行い、研究成果をまとめる。
○各種研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有化を図る。

(3) 各校において

○体育主任・体育部員を中心に、すべての子供が「運動・健康のおもしろい世界」に参加し課題解決に挑戦することができる授業づくりについて実践を進める。
○年間カリキュラムのもと、単元学習の実施及び副読本の積極的な活用を通して、子供の主体的・対話的な学びを図り、体力や運動能力をより一層向上できるようにする。

研究領域・研究学年（中・四国大会研究領域及び小教研ローテーション表より）

郡市	領域	担当学年	郡市	領域	担当学年
第62回徳島県小学校体育科教育研究大会					
徳島市・名東郡	陸上	高学年	板野郡	表現	低中（選択）
鳴門市	ボール運動	高学年	名西郡	水泳	低学年
小松島市・勝浦郡	陸上	中学年	阿波市	体づくり	低学年
阿南市	器械	低学年	吉野川市	体づくり	高学年
那賀郡	会場郡市代理		美馬市・美馬郡	保健	中学年
海部郡	ゲーム	中学年	三好市・三好郡	器械	低学年
第58回中・四国小学校体育研究大会（広島大会）					
板野郡	表現	低中高（選択）			

※第59回 高知大会 阿波市，吉野川市（体づくり【多様な動き・体力】，ボール運動【高】）

第60回 山口大会 美馬市・美馬郡（体づくり【体ほぐし】）

第61回 鳥取大会 三好市・三好郡（保健【中・高】）

<参考文献>

- (1) 文部科学省，「小学校学習指導要領解説 体育編」，東洋館出版社，2018
- (2) 文部科学省，「小学校学習指導要領解説 総則編」，東洋館出版社，2018
- (3) 徳島県小学校体育連盟，第57回中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）実行委員会「第57回中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）大会要項」，2019

<キーワード>

- (1) ◆学習指導要領解説 総則編（P.47「2教科等横断的な視点に立った資質・能力」より）
 - (1) 児童の発達の段階を考慮し，言語能力，情報活用能力（情報モラルを含む。），問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力
 - (2) 児童や学校，地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し，豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

(2) ◆学習指導要領解説 体育編 第1章総説 (P.1 「1改訂の経緯及び基本方針」より)

このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向かい他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

(3) ◆「本質的なおもしろさ」と「おもしろいコト」

(4) 昨年の実践から、「本質的なおもしろさ」について研修部で以下のように整理してみた。

<運動領域>

「本質的なおもしろさ」→その運動を成立させるもの

「おもしろいコト」→その運動に夢中になる出来事 (ワクワクドキドキするコト),

<保健領域>

「本質的なおもしろさ」→健康に関する切実性のある問い

「おもしろいコト」→自身の認識と他者の認識が出合ったときに生まれる差異

領域		本質的なおもしろさ	おもしろいコト
体 つ くり	体ほぐし	対話するおもしろさ	どうすれば感じられるか
	多様・動き	操作するおもしろさ	どうすればできるか
器 械 運 動	マット	移動するおもしろさ	どうすればマットの端まで行けるか
	鉄棒		どうすれば鉄棒の上に上がったり、回ったり降りたりできるか
	跳び箱		どうすれば跳び箱の向こうに行けるか
陸 上 運 動	短距離走	移動するおもしろさ	どうすればスタートからゴールまで移動できるか
	ハードル		どうすればハードルを走り越えて、スタートからゴールまで移動できるか
	リレー		どうすればスタートからゴールまでバトンを運べるか
	幅跳び		どうすればねらった所に着地できるか
	高跳び		どうすればバーの向こうに着地できるか
水泳		移動するおもしろさ	どうすれば目的地まで行けるか
ゲーム		攻防のおもしろさ	攻めたり守ったりできるかどうか
ボ ー ル 運 動	ゴール型		シュートするかさせないか
	ネット型		相手コートにボールを落とすか自コートに落とさせないか
	ベース ボール型		塁を盗るか盗らせないか
表 現	表現	表現するおもしろさ	どうすればなりきれるか
	リズムダンス	リズムに乗るおもしろさ	どうすればリズムに合わせられるか
保 健		健康に関する切実性のある問い	自身の認識と他者の認識が出合ったときに生まれる差異を解消するコト